

## ■ 書評 ■

## 『モグラ—見えないものへの探求心』

川田伸一郎著，東海大学出版会，2010年9月，210頁，本体価格2100円

野幌森林公園の林道が評者の通勤路である。その路上，トガリネズミの死体が散見されるが，ネズミとつくものの齧歯類ではなく，食虫類，広くくりでのモグラ類である。モグラ科がいない北海道ではあっても，道民はその親類を通じ「見えるもの」として食虫類を捉えている（と思う）。しかし，内地の民にとってモグラは「見えないもの」でほぼ間違いはない。評者は山梨で約18年暮らし，その間のモグラ体験は，小学校低学年時（1960年代中頃），同級生の父親が墓地の手入れをしていた時に，捕まえたものを見せてもらったもの以外，記憶にない。その十数年後に阿部永先生（本書p8）から，「中部地方はコウベとアズマ両種のせめぎ合いをしている場」とお聴きし，感慨を新たにしたものだった（なお，本書ではこの「せめぎ合い現象」は触れていないので，念のため）。ちなみに，モグラがヒトの手中でもがく姿を，次回，実見し得たのは，1994年夏，p46で紹介された原田正史先生がアカデムゴロトクの墜落管に落ちていたアルタイモグラであった（p5織田銚一先生が組織した科研の一コマ）。かくのごとく，小哺乳類（の寄生蠕虫類）をライフワークにしているとは云っても，評者のモグラ経験値はほぼ0。確かに，著者が主張するようにこの動物は評者にも「見えないもの」であった。このような動物に真っ向から挑戦し独自の道を見つけつつある著者に，まず，最大限の賛辞を贈りたい。

繰り返すが，評者も寄生虫学の立場から小哺乳類に接してきた関係上，この著者と同じように日本列島を皮切りに，序々に海外へ手を広げていった。評者の場合，ソ連邦崩壊前後に院生・助手だったし，日本経済も順調であったので，キリル文字の論文がすべてであったユーラシアが，一気にリアルな場となった。著者もこのような追い風で飛び出したのであろうが，前述のように，評者と調査地域や関わった人々が重複するので，客観的に

読むのが難しくなったが，お許し頂こう。ただ一点，トラウマとなっているモノを本書で見つけた。それも2カ所（p115, 174）で詳細な写真付きで語られた手回し遠心分離器である。「日本のロウテク」などと牧歌的表現をされていたが，評者にとっていまだ悪夢。評者は，2009年10月，極東ロシア・ボロンスキー国立公園で水鳥の血清分離の手伝いをしたが，あくまでも視察なので，標本の持ち帰りの予定は，一切なかった。したがって，カウンターパートは観光ヴィザを用意したのだが，ハバロフスク空港の出国審査時，件の遠心器のために罰金を取られた。まず，係官にカメラを取り上げられ，すべての写真がビューアーで再生，その中に，遠心器で血清分離する評者の姿があったのだ。結局，これが証拠に普通のツアー客とは見なされず，査証の種別を偽った罪に落とされた。日本語を巧みに操る係官は，最初からカモになり易い日本人を狙っていたのは確定的で，たとえ，この遠心器を扱う写真が無くても，何とか罪を作り上げ，罰金をせしめたであろうが……。

ということで，海外調査ではこのような不愉快なことや危険なことなど多数ある。本書でもその一部を披瀝されているが，悲喜こもごもひっくりめ，若い奴は出て行きなよ，との主張は痛いほど判るし，共感できた。だから，本書で扱われる哺乳類学（著者の専門分野としては，形態，染色体核型，系統進化，生物地理など）を志そうとする方以外でも，海外（とくに，本文の5つの章で扱われたシベリア，北米，雲南，台湾，東南アジア諸国など）でフィールドワークをお考えの方には有益な指針となる。本書によりインスパイアされ，たとえカモられても，困難に果敢に立ち向かう生物科学の野外研究者が誕生することを望みたい（ただし，著者も，評者も損害賠償請求は受け付けないがね）。

（浅川満彦／酪農学園大学）